

## 死の教育用絵本リスト

① 「だいじょうぶだよ、ゾウさん」 ローレンス・ブルギニョン著 (文溪堂)

★★★★★

幼いネズミと年老いたゾウは、毎日仲良く暮らしていました。ある日、ゾウは「もうすぐ遠いゾウの国にいて、もう戻らない」とネズミに告げます。ネズミは、それを受け入れられず、いくつもの季節が巡る中、弱ってきたゾウの世話を一生懸命していました。そうしていくつもの季節が巡るうちに心が成長し、ゾウの国に行くことを受け入れられるようになったのです。

② 「100万回生きたねこ」 佐野洋子著 (講談社)

★★★★★

100万回も死んで、100万回も生きたねこがいました。100万人の人がそのねこを可愛がり、100万人の人がそのねこが死んだときに泣きました。ある時ねこは誰のねこでもない、野良猫になりました。そして一匹の白く美しい雌ねこに魅せられます。やがて子どもが生まれ、自分よりも大切な家族を持つことに。そうして、100万回死んでも悲しくなかったねこは、初めて愛することを知り、愛する者を失って涙を流すのです。

③ 「はっばのフレディーいのちの旅ー」 レオ・バスカーリア著 (童話社)

★★★★★

死を怖がるはっばのフレディに親友のダニエルが答えます。「変化するって自然な事なんだ...死ぬというのも 変わることの1つなのだよ」。フレディの番が来て、地面に降りたとき、初めて自分の命を作った木の全体の姿を見て、そこに永遠の命を感じます。フレディ自身は知らなくても、やがて土にかえり木を育てる力になるということを理解するのです。

④ 「でも 好きだよ、おばあちゃん」 スー・ローソン著 (講談社)

★★★★☆

私のおばあちゃんはアルツハイマー病です。だから周りの人をびっくりさせるようなことをしたり、家族や私のことまでを忘れてしまったりします。だけど、私がおばあちゃんとお話しすると、とても喜んでくれます。絵本を読むときには私をぎゅっと抱きしめてくれます。そんなおばあちゃんのことを私は大好きです。

⑤ 「ひさの星」 斎藤隆介著 (岩崎書店)

★★★★☆

「昔、秋田の北にひさという無口なおなごわらしがおった。」ある大雨の夏、幼い子を助けて川に流されてしまったひさは、東の空の星になって輝き続けるのです

⑥ 「花さき山」 斎藤隆介著 (岩崎書店)

★★★★☆

山菜を採りにいって道に迷ったあやは、美しい花が一面に咲く場所で山ンばと出会う。山ンばはあやに、優しいことをすると美しい花がひとつ咲くという花さき山の秘密を教えます。それからあやは花さき山に美しい花が咲くと思うと幸せな気持ちになるのです。

⑦ 「おじいちゃん」 ジョン・バーニンガム著

★★★★☆☆

おじいちゃんと孫(女の子)の会話は、傍から見ているとちぐはぐで成り立っていないようにでいてちゃんと通じ合っています。その言葉や間がひとつひとつ女の子にとって宝物のようで、お互いの存在の大切さを物語っています。

⑧ 「ずーっと ずっと だいすきだよ」 ハンス・ウィルヘルム著 (評論社)

★★★★☆☆

愛する者との死別がテーマの作品です。死んでしまってからでは、もう「好きだ」と言えなくなってしまうから、気持ちをきちんと伝えよう、と語りかけています。「すきなら、すきと 言ってやればよかったのに誰も言ってやらなかった。言わなくても、わかると思っていたんだね。」

⑨ 「おじいちゃん わすれないよ」 ベッ  
テ・ウェステラ著 (金の星社)

★★★★☆☆

おじいちゃんはヨーストとの約束を忘れないように、いつもハンカチに結び目を作っていました。おじいちゃんが死に、ヨーストもまた結び目を作ります。おじいちゃんを忘れないために。大好きなおじいちゃんの死に直面した少年の、揺れる心情を描いた絵本です。

⑩ 「だいじょうぶ だいじょうぶ」 いたう  
ひろし著 (講談社)

★★★★☆☆

小さい頃から毎日一緒に散歩したおじいちゃん。僕が困ったことや怖いことに出会うたび、おじいちゃんはぼくの手を握り「だいじょうぶ だいじょうぶ」とおまじないをしてくれました。今度は僕がおじいちゃんに・・・。

⑪ 「おおきな木」 シェル・シルヴァスタ  
イン著 (篠崎書林)

★★★★☆☆

幼い男の子が成長し、老人になるまで、温かく見守り続ける1本の木。大きな木は少年のことが大好きで、言われれば何でも与えてしまう。最後に木は自分の全てを彼に与えてしまいます。それでも木は幸せでした。